

ものは基壇の西方1 mに、東側の溝は約3 m離れて位置する。西のものは雨落溝の可能性がある。基壇盛土を除去して下層の南北溝を検出している。この溝は盛土の東縁下に位置するため、平城宮造営時のものと考えられた。

- 大垣基壇と考えた盛土の範囲はW110からW116に及び、その幅約6 mで先の第51次調査の成果と矛盾しない。しかし、基壇の心はW113付近にあることとなり、2 mほど西に偏する。約360mほど北方にあたるため振れを考慮しなければならないが、振れは20'ほどあり大き過ぎる。ただ、大垣本体が基壇の東寄りに構築されたとみれば許容されるところではある。いずれにしても基壇外西方1 mにある南北溝を雨落溝とみるのは妥当でない。下層で検出され造営時のものとみた南北溝はW111～112の間にその中心がある。大垣推定心と一致するため地割溝の可能性が強いが、断定はできない。

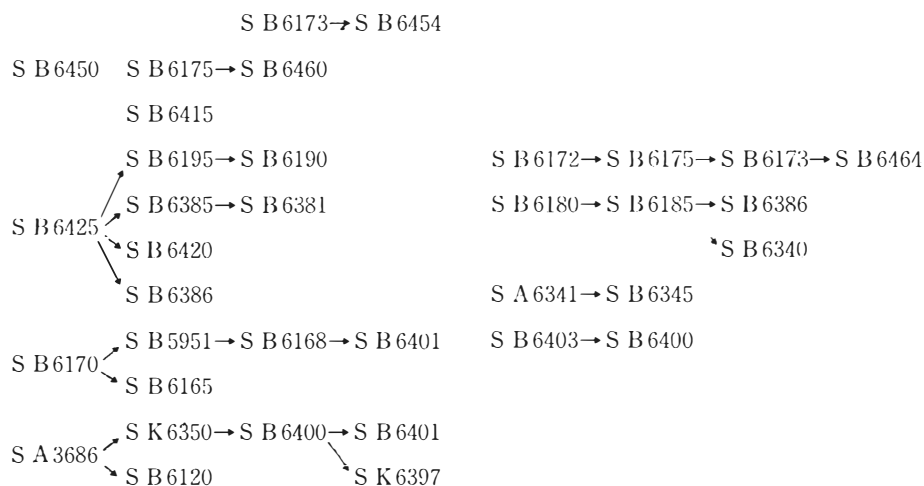
3 遺構の相対年代

- 前節まで、何らの説明を加えることなく、平城宮関係の遺構を第Ⅰ期～第Ⅴ期の5期に区分（廃絶後を含めると6期）して各々の記述を進めてきた。ここでは、記述の順序が前後することになるが、遺構相互の前後関係および同時存在についての記載を整理し、遺構の相対年代決定の根拠を提示し、遺構についての事実報告の結びとしたい。

建物等の建つ地面の層位関係については、ほとんどが地山面で検出されており、したがって整地土上面で検出したものは少ないこと、場所によって整地土が異なるため、特に遠く離れた遺構間では比較し得ないことから、ここでは問わないこととし、必要に応じて確実に層位関係から遺構の前後が知れるものについてのみ取り上げる。

まず、遺構相互の切り合いから前後関係の知れるものを抽出、ついで遺構の配置状況（造営方位、棟通り・柱筋の揃い、建物間の距離、柱間寸法）・柱掘形の形態や埋土の類似性等によって同時存在の明らかな遺構をグルーピングする。これらの他にも、切り合いはないが重複し、同時存在ではあり得ないばあいがあり、傍証となる。以下の表示では→は前後を、……は継続を、||は同時存在の可能性をあらわす。

- * **前後関係** 遺構相互の切り合い関係によって前後を決めることができるものを列挙する。



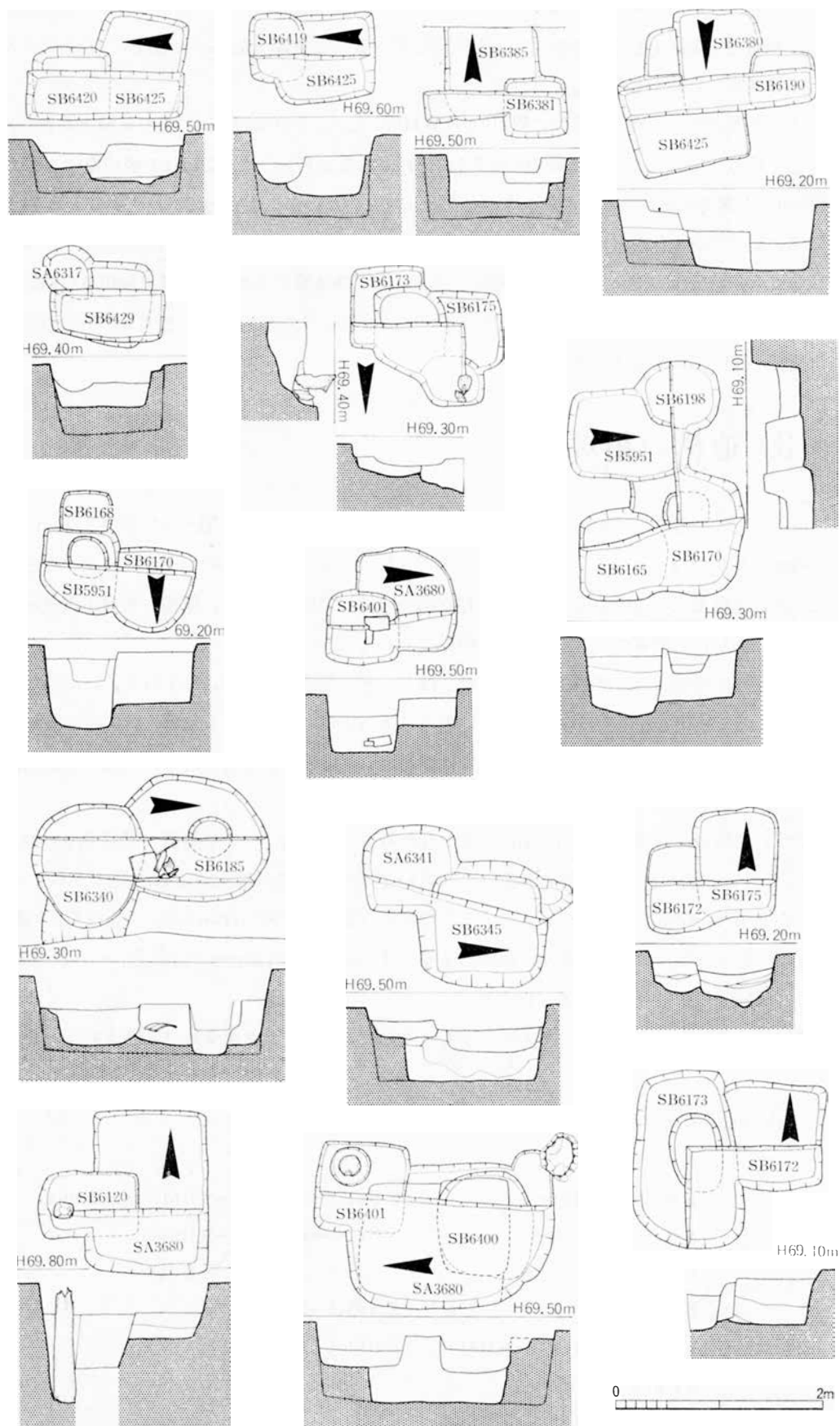
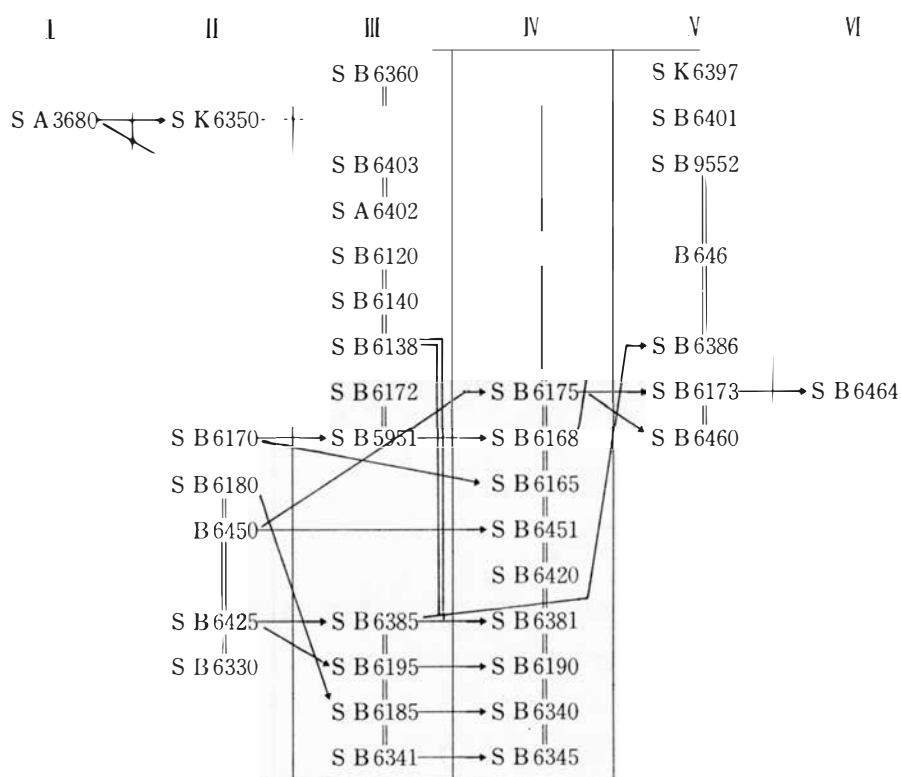


Fig. 21 柱穴の切り合い関係

同時存在 確実に同じ計画によって造営されたと思われる遺構をグルーピングする。

S B 5956 = S B 6450 = S B 6180	S B 6385	S B 6420 = S B 6451	S B 6120
S B 6425 = S B 6330	S B 6195	S B 6381	S B 6140
S B 6460	S B 6185	S B 6190	S A 6138
S B 6173	S B 9552	S A 6186	S B 6340
S B 6401	S B 6386	S A 6455	S B 6345
	S B 5945	S A 6456	S B 6175
S B 3690	S B 6130	S A 6317	S B 6430
S B 6100	S B 6141	S A 6318	S B 6400



Tab. 2 遺構の相互関係一覧